

令和５年度

学校評価システムシート

香川県立石田高等学校

教育方針	全人教育を重視し、人格の向上を図る。将来の郷土を担う人材を育成する。
------	------------------------------------

重点目標	１．基礎学力の充実に努め、学習指導の向上を図る。 ２．基本的生活習慣の確立をめざし、自律的精神の向上を図る。 ３．各種クラブ活動の活性化に努め、強靱な体力と精神力の育成を図る。 ４．教育環境の整備・充実に努め、愛護と活用精神の向上を図る。 ５．生命を大切にし、人権を尊重する精神の向上を図る。 ６．地域に根ざした学校づくりを推進する。 ７．国際化・情報化社会に対応できる人間の育成をめざす。
------	---

達成度	A	ほぼ達成（８割以上）
	B	おおむね達成（６割以上）
	C	変化の兆し（４割以上）
	D	不十分（４割未満）

学 校 自 己 評 価						
年 度 目 標				年 度 評 価		
領域	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
生産経済科	地域社会に貢献できる人材を育成するため、専門教科の理解を深める。	生産経済科で実施する検定の指導を充実させる。農業技術検定に重点をおき、基礎的内容の定着を図る。	農業技術検定３級の合格率 A ８０％以上 B ５０％以上 C ３０％以上 D ３０％未満	今年度の農業技術検定３級の合格率は、86.3％であった。基幹科目である畜産や作物において基礎的内容の定着がみられた。また、専門分野に対する関心の高さや学習意欲が高い合格率に繋がった。	A	２年次に受検する農業技術検定３級にむけて、授業で学んだ内容を実習で確認することで知識の定着を図る。またそのために、授業と実習を関連づけた指導計画や実習展開の工夫が課題である。また、キャリア教育でプロ講師から実際の現場での技術を学ぶことで、専門教科への関心や理解をより深め、産業人の育成を図る。
園芸デザイン科	農業に関する知識を身につけ、農業の持つ多面的機能を理解する。体験的な学習を通して、豊かな心を備えた産業人を育成する。	農場での実習を重視し、農業に関する学習意欲や興味が高まるよう指導する。実習を通して、地域交流や地域貢献の機会を設ける。	農業技術検定３級は７０％以上の生徒が合格できたか。農業技術検定２級を目指す生徒を多数輩出できたか。地域の行事や交流会に参加できたか。	農業技術検定３級は８７％の生徒が合格できた。２級の受験者も少数ではあるがいた。２級造園施工管理技術検定や３級造園技能検定も合格者を出すことができた。地域の行事や交流会にも少しずつではあるが参加することができた。	B	農業技術検定３級の合格率は高くなってきたが、全員合格には至っていない。引き続き全員合格を目指して取り組んでいきたい。また、それ以外の資格も積極的に取り組ませたい。地域の行事に参加することで、将来、積極的に地域を担っていく人材の育成を目指す。
農業土木科	資格取得を勧め、土木技術者として必要な知識・技術・態度を育てる。	土木現場で進むＩＣＴ化に興味を持てるよう、情報機器の活用を促進する。また、資格取得のメリットを説明し、学習意欲の向上を図る。	年間一人あたりの資格取得数 A：１．６以上 B：１．４以上 C：１．２以上 D：１．２以下	２級土木施工管理技士や測量士補など、難易度の高い試験で合格者を出すことができたが、危険物取扱者乙４の合格者が減り、昨年と比べて、資格取得率が１．５に減少した。授業においては、課題研究を中心に、タブレットの活用場面が増加した。	B	昨年度と比べて、危険物取扱者試験の合格率が低下したので、課外等の指導を再検討し、合格率の向上を目指したい。１年生の現場学習会、２年生のインターシップなど、外部との連携授業も、コロナ以前の水準に戻すことができた。次年度も、より外部との連携を深めることができるように、取り組んでいきたい。
生活デザイン科	家庭科で学習した知識や技術がどのように生かされているのかを知ること、意欲的に学習に取り組む態度を育成する。	プロの外部講師による指導の機会を確保し、指導を通して職業や進路への関心を深めさせるとともに、身につけた知識や技術のレベルアップを目指し、資格取得に挑戦するよう意欲向上に努める。	新しい資格や上級級の取得に積極的に取り組んだ割合 A：30％ B：20％ C：10％ D：10％未満	新しい資格や上級級取得にチャレンジした割合は50％と高く、資格取得に意欲的な姿を感じることができた。しかし、これらの生徒は全体の中で見ると、20％程度の生徒であった。	A	積極的に資格取得に取り組んでいる生徒は２割程度であった。今後は多くの生徒が知識や技術の取得に意欲的に取り組み、資格取得にチャレンジしていけるように、プロの外部講師による指導を充実させ、早い時期から進路への関心が高まるような環境づくりを工夫したい。
教務	家庭学習の習慣を身に付けさせる。	宿題や課題を課し、家庭において学習ができるよう工夫する。個別指導を充実し、学習意欲の高い生徒の引き上げとともに、学習の苦手な生徒の指導にも力を入れる。	家庭学習時間が90分以上の生徒の割合 A：60％以上 B：50％以上 C：40％以上 D：40％以下	学習時間調査を、定期考査前の6月と11月に各7日間実施した。1日の平均は第1回が80.7分、第2回が66.4分であった。90分以上の生徒の割合は第1回が40％、第2回が29％（昨年度第1回38.2％、第2回35.1％）であった。	D	1日の平均家庭学習時間90分以上の生徒の割合が昨年度より少し向上した。例年同じような傾向が見られるが、教員の声かけや放課後に学校で学習させるなど、家庭学習だけではない学習習慣を定着させる工夫がなされた。また、家庭学習時間0分の生徒が考査日に迫って、その人数は減少しているが、一定以上見られたので、計画的に学習を進められるよう促したい。
総務	P T A活動の活性化を図り、年間に3回以上の保護者の来校をめざす。	昨年度は、1年2.8回、2年3.1回、3年2.4回、全体で2.7回であった。P T A総会が実施できず体育祭は無観客等の影響もあり、令和3年度に比べ微増で、目標達成度はC判定となった。評価指標の年間3回来校の設定は、このままとしたい。また、学校のSNSを定期的に周知し、フォロワー数を増やしたい。	保護者の来校回数について A：全ての学年とも3回以上 B：2つの学年で3回以上 C：1つの学年で3回以上 D：全ての学年とも3回未満	保護者の来校回数は、1年3.2回、2年2.4回、3年3.1回、全体で2.9回であった。今年度も、P T A総会の中止、体育祭の無観客実施が影響している。ただ、昨年度の1年2.8回、2年3.1回、3年2.4回、全体で2.7回に比べ増加している。学期に1回の割合で、年間3回と設定しているが、昨年度に引き続き目標を満たすことはできなかった。	B	来校回数を指標にしたのは、P T A活動等とおして保護者に学校の指導内容（学習・進路・生活など）や行事などの情報を提供し、それが生徒と保護者の対話の機会に繋がることを目的としている。総務部だけの取り組みではないが、学校の X や Instagram の周知を定期的に行い、フォロワーを増やしたい。昨年同期（1月）に比べ、Xは40増の166フォロワー Instagramは78増の384フォロワーとなっている。

学 校 自 己 評 価						
年 度 目 標				年 度 評 価		
領域	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
生徒指導	・ 基本的な生活習慣を身につけさせる。 ・ 本校の「いじめ防止対策基本方針」について保護者、生徒、教職員への啓発を行う。	・ 欠席理由をはっきりさせる。 ・ 遅刻回数の多い生徒は、保護者に連絡し、改善の依頼をする。 ・ 本校の「いじめ防止対策基本方針」についてＨＰ等で理解を深める。	次の数値目標が達成できたか。 出席率：99%、遅刻：1.5 回/ 1 人、早退：0.2 回/ 1 人 Ａ：すべて達成できた Ｂ：2 つ達成できた Ｃ：1 つ達成できた Ｄ：達成できなかった	遅刻：4.6 回／1 人、早退：0.6 回／1 人、出席率：96.5%という結果だった。昨年より遅刻・早退は少し減少した。 ・「いじめ防止」については、今後もいじめのない学校になるよう取り組んでいきたい。	D	・ 遅刻を減らせるように、声かけを粘り強く続け、また、家庭との連絡を密に取りながら指導していきたい。 ・ 生徒の変化を見逃さず「いじめを許さない」指導を継続していきたい。
進路指導	生徒一人ひとりの進路実現をめざして、早い時期から進路意識を高めさせたい。そのための適切な進路情報の提供、ガイダンス等の実施、各種説明会への参加、進路相談の充実をはかりたい	・ 基礎力診断テストの実施により、自己の実力を把握し、成績および進路意識向上のきっかけとする。 ・ 求人などの企業の情報及び大学等の情報を、ホームルームや配布物を通じて早い時期から生徒に提供する。 ・ 校内進学説明会、就職説明会の充実を図る。	・ 進路希望調査の「未定」者が1 年生で10 人以下、2 年生で5 人以下であること。 ・ 3 年生の就職希望者で、「アルバイト等、未定」がいないこと。 ・ アンケート等の結果で、Ａ、Ｂで8 割以上を得ること。	・ 進路希望調査での「未定」者は、1 年生16 名、2 年生13 名であった。 ・ 3 年生就職希望者について1 月中旬時点で未定者は3 名である。 ・ アンケート結果についてはＡＢで 9 割を超えているものの、全学年において生徒からの評価よりも保護者からの評価が低かった。	B	進路決定の遅れについては、昨年度までのコロナ禍による進路関係行事の中止・縮小、オープンキャンパスの中止や延期などの影響がいまだ響いているのではないかと感じた。今年からは、進路関連の行事はコロナ前と同水準に戻っているため、担任との連携を強化しつつ、1. 2 年生の進路について情報提供や相談機会を増やしていきたいと考えている。
人権・同和教育	生徒の自尊感情を高めることにより、自分というかけがない存在を大切にし、その上で他者を思いやる気持ちを育てたい。	・ 「自分」という存在の大切さを認識できるように声かけを行う。 ・ 「やればできる」という経験をさせるために、様々な場面で成功体験をつませる。 ・ HR活動での授業を通し、様々な人権課題について考え、他者への相互理解を深めていく。	Ａ：3 項目中3 項目達成 Ｂ：3 項目中2 項目達成 Ｃ：3 項目中1 項目達成 Ｄ：いずれも達成できず	・ 生徒アンケートで「自分という存在を大切に思える」という項目は、3 分の2 にあたる66.6%の生徒がＡまたはＢと回答した。 ・ 「やればできると思う」や「人と違っていても自分が正しいと思うことは主張できる」は、ＡまたはＢの回答がそれぞれ 65%と 62.9%で、わずかが3 分の2 を下回った。	C	・ 本校の教育活動全体を通じて生徒は自己肯定感を育むことができているが、人権・同和教育部としても、地域との連携を大切にし、作品応募やボランティア活動、行事への参加など、活躍の機会を生徒に提供したい。 ・ 人権・同和教育HRは、映像資料を変えたり新たな人権課題を組み込んだりと一部変更した。充実したHRとなるよう、今後も見直していきたい。
環境保健	生徒自身が健康維持・管理を自ら実践する能力を高めるとともに感染症対策には万全を期す。加えて、災害から身を守る備えをしておく。	健康生活の基本は食事と睡眠からを認識させる。 ・ バランスのとれた食事をとる。 ・ 睡眠時間は6 時間以上。 ・ 非常持ち出し物の準備ができている。 ・ 手指消毒は頻繁にできている。	Ａ：4 項目中4 項目達成 Ｂ：4 項目中3 項目達成 Ｃ：4 項目中1 ～2 項目達成 Ｄ：いずれも達成できず	・ 防災・減災に対する意識を高め、自分自身の身を守るための備えを拡充させたい。 ・ 健康管理については、睡眠時間の確保など基本的生活習を身につけさせることが重要である。	B	・ 健康管理については、まずは、基本的生活習慣を身につけさせることを徹底させる。 ・ コロナが5 類となり落ち着きを見せてきたが、インフルエンザとも併せて継続して感染予防対策をしていく必要がある。 ・ 防災・減災についても自助と共助意識をもっと高めていく必要がある。
特別活動	・ 生徒が主体的に企画・運営するとともに、社会に貢献できる生徒会活動を目指す。 ・ 集団の中で他者と交わり、協働して物事に取り組む姿勢を育む。	・ 学校行事を新しい方法で運営したり、生徒会役員を増員したりすることで、生徒会活動の活性化を図る。 ・ ボランティアや委員会活動を活発に行い、誰かの役に立とうとする意識を持たせる。 ・ 特別活動における生徒の取り組みをよく観察し、適切に評価できる体制づくりを行う。	Ａ：3 項目中3 項目達成 Ｂ：3 項目中2 項目達成 Ｃ：3 項目中1 項目達成 Ｄ：いずれも達成できず	・ 生徒会役員の中で、学校行事の担当を決め、それぞれの役割を責任持つて行うことで活動の活性化に繋がってきている。 ・ 先生方の協力もあり、各委員会の活動が積極的に行われた。 ・ 評価の対象とする学校行事やホームルーム活動を限定することで、適切に評価ができる体制づくりに近づいている。	A	・ 生徒会役員の増員をはかり、新しい方法を取り入れたり、改善したりしながら活動を活性化していく。 ・ 学校行事や委員会活動、部活動等に積極的に参加する中で集団の中で他者と交わり、協同して物事に取り組む経験を育ませたい。 ・ 今年度改善した点について適切であるか議論し、さらなる改善に努めていく。
教育相談	・ 生徒や保護者が教育相談を活用できるよう環境を整える。 ・ 支援を要する生徒に対して継続的で効果的な支援を行う。 ・ 教職員へ教育相談に関する啓発を行い、生徒理解を促す。	・ 学校行事やメール配信等の機会を通じて、生徒や保護者に教育相談の情報を提供し、その利用を呼びかける。 ・ 支援を要する生徒の情報を教職員で共有し、連携して支援を行う。 ・ 現職教育や職員会議の際に、教職員に対して啓発や情報提供を行う。 ・ ＳＣ・ＳＳＷによるHRやグループ面談、個人面談を実施する。	Ａ：4 項目中4 項目達成 Ｂ：4 項目中3 項目達成 Ｃ：4 項目中1 ～2 項目達成 Ｄ：いずれも達成できなかった	学年ごとに実施するHR活動は計画通り実施できた。1 年生のグループ面談は生徒の実態把握に役立てることができた。年4 回、教育相談だよりを発行し、生徒や保護者への情報提供を行ってきた。教職員との連携は必要に応じて行うことができた。	B	引き続き継続支援が必要な生徒への対応を丁寧に行っていきたい。今年度の学校評価アンケートで「ＳＣ・ＳＳＷに相談できることを知っている」と答えた保護者は全体で 84.4%と昨年度より 4.7 ポイント上がった。しかし、生徒は昨年度より下がっているため、教職員との情報共有を細目に行い、支援が必要な保護者や生徒の把握に努めたい。また、教職員への情報提供もＩＣＴを活用し継続して行きたい。
ICT 教育推進	授業担当者が年間 1 回以上の ICT 研修授業を実施する。(実施率1 0 0 %)	考查期間ごとに校内研修（年5 回）を開催。各学科、教科の教員が活用方法の発表、またレクチャーを行うことで共有する。	ICT 研修授業の実施率 Ａ：1 0 0 %実施 Ｂ：8 0 %以上 Ｃ：6 0 %以上 Ｄ：4 0 %以上	ICT 研修授業実施率 93.8% （32.0%増）、報告書提出本数 30 本 （3 本増）、 100% の教員が「実践している」と回答（21%増）	B	少しずつ ICT の活用が人口に膾炙してきている。研修授業実施率が 100%に満たないことと、 日常的な活用 がまだできていないことが課題。 授業での活用は増えてきているため、次年度は 校務で活用する 場面を増やすために啓発や提案を行う。